

オホーツクの風

平成24年1月11日(水) 新年号(0006)

発行所
北見赤十字病院の
明日を考え支援する会
事務局
北見市緑ヶ丘1-10-16
Tel 0157-61-0684

赤ちゃんの部屋をリニューアル

お産の病床をリニューアル

新しい年を迎え、私たち・支援する会は北見赤十字病院の医師・看護師・コメディカルそして医療にたずさわるすべてのみなさまの日ごろのホスピタリティに感謝すると共に迎春にあたり一層のご活躍を願っています。

新年を迎え、新しい命の誕生に日夜懸命に取り組み同院の「周産期母子医療センター」



プレイバシーに配慮したロビー空間に改装。

を取り上げました。産科医師・小児科医師・看護師そして多くのコメディカルスタッフがチームとなつてお母さんと赤ちゃんの診療や治療そしてお産に取り組んでいます。

集中治療室(NICU)があります。中には赤ちゃんの体温を保つための保育器や、人工呼吸器、赤ちゃんの状態を細かく観察できるモニター類が備えています。昨年、病院の見学会でその施設を訪れた様子に感動した。

施設の老朽化が甚だしいこと、時代の変化で仕事を持つ女性が受診しづらいなど当センターへのいろいろな意見を戴いています。

新しい病院建設が始まっていますが、お産

などは待たなす。新病院建設の検証をふくめて、最小の費



増設した個室はゆったりと入院生活ができます(有料)。

たりと入院生活を送ることが出来ます。②一般産褥(さんじよく)室(4床)のベットはすべてセミダブルベットになり、赤ちゃんと添い寝ができ、産後の日々をゆつくりとすごすことが出来るようになります。

生したご夫妻をお祝いしてホテルなみの「お祝い膳」を心をこめて調理します。

⑤午後の妊婦健診を始めました。また母科学級・1カ月健診・予約検査など紹介なしでも外来診療を行います。

当センターは北見市内の2次医療を担う基幹病院の役割を担っています。市内の産婦人科を標榜している病院、診療所からの紹介にも、速やかに「地域医療連携室」が窓口になり、患者さま目線に対応しています。当センターの詳しい情報は



「祝い膳」、家族で喜びを。

Q&A

Q・周産期医療とは
A・妊娠22週から生後満7日未満までの期間をいい、合併症妊娠や分娩時の新生児仮死など、母体・胎児や新生児の生命に関わる事態が発生する可能性があります。

周産期を含めた前後の期間における医療は、突発的な緊急事態に備えて産科・小児科双方からの一貫した総合的な体制が必要であることから、特に「周産期医療」といわれています。

同病院のホームページをご覧下さい。今回の取材・写真提供には総務課、企画課、地域医療連携室の協力を戴きました。有難うございました。

私たち・支援する会と北見日赤との関係は厳しいものがあります。私たちは今年も同病院と患者さん、北見市民との仲人役を果たして行きます。

別れそして感謝(上)

会員 中田ふみ子

いま長年夫と共に病魔と闘い、泣いたり笑ったりと何度も苦難を乗り越え、過ぎた人生を回想しています。

小康状態が続く時はほつとする日々もありましたが、私たち夫婦はいつも病気と背中合わせの人生でした。

夫は二、三年前から最後の入院までは不調を訴えることが多くなり、その度にいつもかかり付けの先生に良く診察して頂きました。

今回も検査の結果いつもと余り変わりないからと言われ、投薬を変えて様子をみていたようでした。

しかし、不調が長く続くので、札幌の病院に行つて診ていただきましたが、病名は『突発性乾湿性肺炎』と同じでした。北見に帰り掛かり付けの病院で入院させて下さいとお願ひしたら「家で気楽に

寝起きしたら、病院のベッドより時には庭の散歩も出来るし空気は良いし」ということでした。

今思うと、もうその頃から余り長くない事を先生は察していたのでしょうか。

二人で不安の日が続く、また悪い事が次つぎと重なり、日ごとにトイレが近くなり、夜フトンに入つても寝つく時間が無い程、五、六回はトイレに通うのです。もしや膀胱も悪いのではと思ひ、二人で日赤病院泌尿器科へ行くと「中田さん、膀胱より心臓と呼吸器がひどい。これでは辛いよなア、僕の専門ではないから」と、すぐ呼吸器科へ紹介状を添えて回され、早速入院することにになりました。

改めて診察され、すぐ酸素吸入です。このとき酸素が四十のこと

です。

平成十三年九月二十八日、これが最後の入院になりました。担当医は「僕は前にも診察したことがあるね」これは奇遇だと思ひました。何年か前に診て頂いたことを思い出していました。

この入院は一応一ヶ月の診断でした。私は少し長くなつてもよくなつて帰れるなら……。家での一人は寂しいが退院できることを願つて家と病院を往復する毎日が続きました。

時には昼食をとりながら見舞つてくれた方々のことなど嬉しそうに話しかけていました。日数を重ねていると友人、知人の方々からお見舞いやお花、美味しい果物などいただき主人と共にありがたく嬉しく思ひました。

検査の後、先生から説明があり、これから

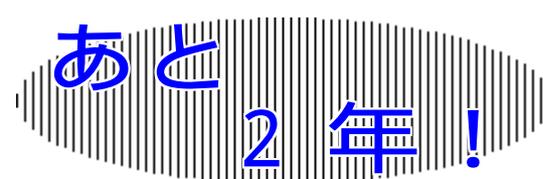
は酸素吸入を続けなければならぬこと、それには障害者手続きをしましょうと言われ、主人も私もショックでした。

市役所へ行き手続きを済ませ、二人で家に帰れることを願ひました。ひと月近く経つたころ夫は「さつぱりよくなるならぬ、このぶんならかえれないなア」とつぶやいていました。

それから間もなくのことです。主治医から最期の近いことを知らされました。

先生は「本人は相当辛いはずですよ」と病状を話してくださり、主人との別れが一步一歩近づいていることを知らされて、長い間薬を飲み続け苦しんだのだからと、自分に言い聞かせても、ただ泣くしかありませんでした。

(つづく)



代表 谷川勝男

とわくわくどきどきしてしまふ。

2011年11月1日、70回目の誕生日を迎えて「古希」への思いを深くしたわが命に思いをのこすことはいないが、思えば当時「不治」の病でもあつた結核に罹患して、北見赤十字病院の女医先生にアメリカ渡来の「パス」を処方されて命をなげらえることができたのが60年前、11歳のときだった。

いろいろな思い・考へがあつて、いろいろな営み・行為があつてしかし、新・北見赤十字病院は平成26年の開院にむけてその活動



をスタートさせたのである。

そして完成したその病院を目にした時、すべての市民、オホーツク圏の人々、道東一円の人々さえ、北見のここに、この病院ができて良かったと思つてくれるに違いない。そう信じて、新病院で仕事をされるすべての人たちと共に、大切な病院を育む心の準備をしながらその日を待ちたい。

編集後記

謹賀新年

日本中に甚大な被害を残して、平成23年は去りました。しかし、私たちは各地にそれらの困難を乗り越えた人たちの支えあう姿がまぶしく輝いていることを知りました。

新しい年は、私たちのオホーツク圏においても命や家族の大切さ、地域の絆など学んで行きたいと思ひます。(阿久津)